

た。菌糸生育は5°C～30°Cで認められ、適温は20°Cであった。菌核より生じた子のう盤（径3.5 mm, 柄5.1 mm）からは子のう胞子（12 × 5.7 μm, 核数2個）を単列に8個内包する子のう（150 × 8.8 μm）を認め、rDNA-ITS領域の塩基配列は *Sclerotinia sclerotiorum* と一致したため、本菌を *S. sclerotiorum* (Libert) de Bary と同定した。本病は我が国では未報告のため、病名をサルビア菌核病（英名 *Sclerotinia Rot*）と提案したい。

（大阪食とみどり技セ・* 府立花の文化園・
** 岐阜大流域研セ・*** 花き研）

(19) 植松清次・海老原克介・* 宇佐見俊行 **・田中（三輪）千華・宍戸雅宏 **・雨宮良幹 ** センリョウから分離された *Phytophthora nemorosa* (日本新産) Uematsu, S., Ebihara, Y., Usami, T., Tanaka-Miwa, C., Shishido, M. and Amamiya, Y.: First Report of *Phytophthora nemorosa* Isolated from *Chloranthus glaber* in Japan 演者らは2002年関東部会においてセンリョウに発生した疫病を報告した（日植病報69: 39. 2003）。今回、形態観察およびrDNA ITS領域の塩基配列の解析を行い、種の同定を試みたところ、3種の疫病菌の関与が明らかになった。内2種は本邦に広く分布する *P. citrophthora* および *P. drechsleri* と同定した。第3の種は、①菌糸は膨潤し、厚壁胞子を形成せず、遊走子のうは遊走子のう柄上に仮軸状に形成し、球～倒洋梨形、乳頭突起を有し、脱落しやすく、大きさは（以下平均）56.3 × 38.0 μm で12 μmの柄を備える、②V8ジュース寒天培地上で有性器官を単独で形成し、蔵卵器は球形（直径28 μm）、蔵精器は底着し（14 × 12 μm）、卵胞子は球形で（直径22.4 μm）、未充満性である。③5～22.5°C（適温15～20°C）で生育するなど、米国西海岸における sudden oak death の病原菌の一つとして知られる *P. nemorosa* の記述とほぼ一致した。また、rDNA ITS領域の塩基配列も *P. nemorosa* と100%一致した。以上から、本菌を *P. nemorosa* Hansen et Reeser と同定した。本菌は本邦で初めての記録である。（千葉農総研暖地・* 千葉大園芸）

(20) 築尾嘉章・守川俊幸・* 景山幸二 ** *Phytophthora* sp. によるキク疫病（病原追加） Chikuo, Y., Morikawa, T. and Kageyama, K.: *Phytophthora* sp.: Addition of the Pathogen on Phytophthora Root Rot of Chrysanthemum (*Chrysanthemum morifolium*) in Japan 2002年に富山県富山市及び黒部市の露地コギク生産農家において、萎凋枯死する病害が発生した。初め下葉が黄化し、地際茎部は褐変した。根表面および主根内部も褐変した。罹病部からBNPRA-HMI培地により *Phytophthora* 属菌が分離され、接種試験の結果、病徴を再現できた。V8培地上の菌叢は白色綿毛状、菌糸

は10～33°Cで生育し、適温は30°C付近。遊走子のうは頂生、楕円形～卵形、乳頭突起なし、非脱落性、大きさ98 × 60 μm、時に遊走子のうを貫生。雌雄同株性で蔵卵器は球形、直径29–41（平均33）μm、蔵精器を蔵卵器基部に1個側着した。卵胞子は平滑、非充満。またV8培地上では無柄・球形～倒卵形の厚壁胞子を多数形成した（大きさ50 × 42 μm）。以上の形態は、既報のキク疫病菌 *Phytophthora cactorum* とは異なった。よって本菌をキク疫病の病原に追加したい。本菌のrDNA-ITS領域の塩基配列は既報のいずれの疫病菌とも合致せず新種の可能性がある。なお本菌は岐阜県のポットマムで発生した疫病（植物病理学会関西部会, 2006）の病原と塩基配列がほぼ同じであった。

（花き研・* 富山農技セ野菜花き試・** 岐阜大流域研セ）

(21) 田中（三輪）千華・植松清次・大谷 徹・海老原克介・* 景山幸二 ** エキウムおよびカラタチバナに発生した疫病（新称） Tanaka-Miwa, C., Uematsu, S., Ohtani, N., Ebihara, Y. and Kageyama, K.: First Report of *Phytophthora Rot of Echimium wildpretii and Ardisia crispa* Caused by *Phytophthora nicotianae* Breda de Haan in Japan 千葉県で2000年9月にエキウム (*Echimium wildpretii*) および2002年10月にカラタチバナ (*Ardisia crispa*) の葉、葉柄および茎が褐変腐敗する症状がみられ、腐敗した部位から *Phytophthora* 属菌が分離された。エキウム菌およびカラタチバナ菌ともに遊走子のうは乳頭突起を有し、球～卵形、非脱落性、大きさ（以下平均）47 × 39 μm および46 × 35 μm、厚壁胞子は直径24 μm および20 μmであった。エキウム菌は *P. nicotianae* 交配型A1との対峙培養で、一方カラタチバナ菌は同A1との対峙培養または単独で有性器官を形成した。それぞれ蔵卵器は直径27 μm および26 μmの球形、卵胞子は直径23 μm および22 μmの球形、蔵精器は蔵卵器に底着し、蔵精器の大きさは10 × 14 μm および11 × 12 μmであり、両菌とも7.5–35°C（適温25–32.5°C）で生育した。両菌とも接種試験により病徴を再現し、再分離された。以上の結果から、*P. nicotianae* と同定された。病名をエキウム疫病およびカラタチバナ疫病と提案する。

（千葉農総研・* 千葉県安房農振セ・** 岐阜大流域研セ）

(22) 猫塚修一・兼松聡子・* 原田幸雄 **・田中 and 明 **・佐野輝男 ** 日本新産種 *Valdensia heterodoxa* によるブルーベリーバルデンシア葉枯病の発生（新称） Nekoduka, S., Kanematsu, S., Harada, Y., Tanaka, K. and Sano, T.: *Valdensia Leaf Blight of Blueberry Caused by Valdensia heterodoxa* (New disease) 2004年7月、岩手県内のブルーベリー‘ジャージー’（約20年生）の葉に、はじめ褐色の斑点を生じ、輪紋を形成した後、落葉する病気が発生した。葉の症状は、